

皆様お元気ですか？

残暑きびしい中、アースガーデン建物内では東西に風の道が1本通っていて、南北に吹きぬける道も5本あり、常に空気が動いています。南と東西の窓はスダレや、ブドウ、豆、スイカズラやマクワウリの緑の葉に覆われています。室内は昼間のかんかん照りの時でもたいてい30℃位。扇風機をたまに使う程度でしのげます。

さてアースガーデンでは7月にクワノミ、スグリ、ビワ、スモモを収穫し、今はブドウ、ブルーベリー、バナナウリの果実が収穫できます。アブラゼミ、ヒグラシ、キリギリスがにぎやかに鳴き交わす中、キュウリ、ナス、トマト、オクラ、ピーマン、モロヘイヤなどの夏野菜も元気に育っています。収穫の際、庭を歩くと無数の生き物と出会い、ガーデン全体がビオトープのようです。山野草を含む地元の雑草を少しは残しながら混植で多くの種類のを植えていった結果、豊かなお庭生態系が作られ「食べられるビオトープ」ができたのです。



写真①

以前からこのお庭の生き物調査をしたかったのですが、ようやく実現しました。8月5日にNPO法人シニア自然大学、ビオトープ科の知人が、ビオトープ指導員の方と一緒に来てくれたのです。このおふたりは1泊2日で滞在してもらい、生き物調査をしていただきました。(写真①) その結果、このガーデンは土壌圏も地上部も生き物が豊かで、小さな空間に食物連鎖のピラミッドが多く存在することが確認できました。例えば、菌類を食べるテントウムシがいて、それを狙うキリギリスがいて、その上位にアシナガバチがいます。空中にはアキアカネ(トンボ)が舞い、その上にはツバメが10数羽飛んでいます。(後ほど調査報告書をいただけるとのこと。楽しみです。)

また、見ただけで有機物が分解しているのがわかり、土壌にはミミズやダンゴムシがいっぱいです。被捕食者となる多くの小さな虫を、クモ、カエル、トンボ、カマキリ、ハチやアブなどの捕食者が常に食べています。そのため、特定の害虫が大発生することなく、抑止とバランスがとれた命あふれる庭になっています。

これにより、人間活動で生物多様性を破壊するのではなく、生物多様性の維持と人間の生存基盤である食料生産を両立させるのはやはり有機農業だと実感しました。我が家の小さな有機ガーデンはその事例と言えます。こんなガーデンが都会にもたくさんできると良いと思っています！

さて皆様は、2010年の春号で紹介したウサギ(うさびよん 写真②)のことを覚えておられますか？あのウサギはガーデンの野草を食べて、自らの排泄物でできた「びよんぼすと」でガーデンにお返ししていましたが、今年の6月より後半身が不自由になり介護ウサギになりました。私はウサギが楽に過ごせるように一生懸命世話をしましたが、8月13日の早朝に亡くなりました。8歳半でした。ウサギの亡骸はガーデンのサンシュユの木の下に埋葬され、まもなくガーデンの一部となり、他の多くの命を育んでくれることでしょう。



写真② 元気な頃のうさびよん

2011年8月15日

アースガーデン 植月 千砂